



# TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT2 1476

## 希少な出会い ベルリン・フィルとピエール・モントゥー

この 1960 年ベルリン・フィルのライブ録音のリリースは大変貴重である。なぜなら、ピエール・モントゥーとベルリン・フィルの数少ない共演の記録だからである。このフランス人指揮者がベルリン・フィルを指揮したのはたったの 2 回。1933 年 4 月 5 日、モントゥーが 58 歳の時はじめてベルリン・フィルの楽壇に登場した。元のフィルハーモニー・ザールで、演目はセザール・フランクの交響曲ニ短調とポール・デュカスの交響詩《魔法使いの弟子》、ショパンのピアノ協奏曲ホ短調 (Pf: リリー・クラウス)、ドビュッシーの《牧神の午後への前奏曲》、イーゴリ・ストラヴィンスキーの組曲《ペトルーシュカ》だった。ショパンの協奏曲を除けば、どれもモントゥーの代表的なレパートリーである。モントゥーが再度このオーケストラと共演するまでには、27 年という歳月が流れる。1960 年、ハーデンベルグ通りの音楽大学ホールで 3 回のコンサートである。この際には、ドイツ、フランス、ロシア音楽を取り混ぜたプログラムを披露した。

ピエール・モントゥー (1875 年パリ生まれ。1964 年アメリカのメイン州ハンコックで死去。) はパリ音楽院でヴァイオリンとヴィオラを学び、指揮の道に進む以前にはオーケストラの楽員であった。指揮活動を開始すると、名声はあつという間にフランス内外に広まった。1917 年から 18 年のシーズンには、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場の指揮者として活躍。1919 年から 1924 年にかけては、何度かボストン交響楽団やフィラデルフィア管弦楽団の客演指揮者も務めた。フランスにおいては、パリ交響楽団の創立に関わり、この楽団とは 1930 年代に一度だけベルリンで演奏を行ったことがある。1940 年以降はアメリカを拠点とし、1942 年にアメリカの市民権を得た。この国でまず、サンフランシスコ交響楽団の客演指揮者を務め、1952 年より首席指揮者となる。この間もヨーロッパの主要オーケストラとの共演を続け、重要な 20 世紀作品の初演も多くこなした。1911 年、ストラヴィンスキーのバレエ音楽《ペトルーシュカ》、翌年ラヴェルの《ダフニスとクロ

エ》が有名である。さらに 1913 年、モントゥーは音楽史上衝撃的な事件となったストラヴィンスキーの《春の祭典》の初演指揮者としてその名を刻んでいる。このバレエ音楽は当初、大変な批判と拒絶にさらされた。

モントゥーが 1960 年にベルリンに再び現れた時には、当時活動している指揮者のなかで最長老の 85 歳であった。ベルリンの有力紙 2 紙の批評記事の見出しはそれぞれ「驚くべきバイタリティー」(Die Welt)、「振り続けることの喜び」(Der Tag)とされており、この高齢の指揮者への称賛が述べられている。

このコンサートではミシェル・シュヴァルベがソロを務めた。このヴァイオリニストは 1919 年にポーランドのラドムに生まれ、10 歳にして世に出た神童であった。最初はワルシャワでモーリッツ・フレンケルに師事したが、後にパリでかの有名なジョルジュ・エネスコについて研鑽をつむ。シュヴァルベはワルシャワのヴィエニアフスキ・コンクールの入賞者でもある。エルネスト・アンセルメは彼のオーケストラであるスイス・ロマンド管弦楽団(ジュネーヴ)の首席に迎え入れた。シュヴァルベはヨーロッパ各地でコンサート活動を行い、自身の弦楽四重奏団とトリオ・デ・ジュネーヴも設立した。1957 年、ヘルベルト・フォン・カラヤンの招聘を受け、コンサート・マスターとしてベルリン・フィルに加わり、1986 年の引退までこの地位にあった。

1960 年 10 月初頭、これがモントゥーとシュヴァルベの最初の出会というわけではない。92 歳になったミシェル・シュヴァルベのインタビューで、若い時にパリでモントゥーに会った話を聞かせてくれた。その時、シュヴァルベはモントゥーの指揮法のクラスに参加し、大きな影響を受けたというのだ。彼の言葉を借りると、ミシェル・シュヴァルベは指揮に「心酔」した。どのオーケストラも一度彼と演奏するともう一度演奏したがった。1970 年代にヘルベルト・フォン・カラヤンが企画した若い指揮者のためのコンクールに出場、なんと首席指揮者の前で指揮をするという事態となった。コンクールということで、オケは粗末なほど小さく、取り上げたのは誰もが知っているような作品ではなかった。「自身のために、果たして自分がどれくらい出来るのか知りたくて、敢えてこの困難に立ち向かいました。自分を試したとあってよいでしょう。カラヤンは近くに座っていました。さらに、私がヘルベルト・アーレンドルフ(コンクールの開催に尽力しカラヤンを補助した人物)にカラヤンの感想を聞きたいと申し入れたところ、快く引き受けてくれました。アーレンドルフによると“答えは非常に短かった。‘指揮に関しては申し分ない。彼が望むなら譜読み段階のリハーサルは彼にまかせよう。’とのことだ。”とのことでした。」

シュヴァルベは 1960 年のピエール・モントゥーとの共演の詳細について、すでにそれほど多くは覚えていなかった。しかし、どの様な演奏だったかはしっかりと思い出すことができた。彼は伴奏部にもソロ部分にもまったく満足していなかった。「この協奏曲はベルリンのコンサート前にも後にももっと良く演奏したものだ。例えば、ケルンでの演奏。そこでの演奏は、もっと正確でリズムカルだった。すでに大変年老いていたモントゥーはサン＝サーンスはこの曲が「正確」に演奏されることを望んでいたと考えていた。いわば、メトロノームのような正確さを求めた。シュヴァルベは「ああ、マエストロ。サン＝サーンスも人間だったということをご存じですか？この曲には人類が定規を使ったように正確には絶対演奏できない部分がたくさんある。例えば最後の楽章など。」

と主張したが、それでもモントゥーは納得がいかず「それにはまったく賛成できないな・・・君はわたしがどんな風を感じているかわかるはずだ・・・まったく自由でない！」と答えたという。

しかしながら、聴衆や評論家はまったく違った見解を示した。協奏曲の演奏にもその批評にも熱狂が見てとれる。たとえばハインツ・ヨアヒムは *Die Welt* 紙でこう述べている。「聴衆はこの高雅で、圧倒的に活気に満ちた完璧なまでのサン＝サーンスの協奏曲が、いうなればもっとフランス音楽的に演奏されることを期待していたかも知れない。」同時に、「ミシェル・シュヴァルベは、この‘名人’サラサーテに献呈された最も高度な技術を要する作品を驚くほどの輝きと華麗さで表現した。その超絶技巧や音色の高貴さは聴くものを惹きつけてやまず、特に最終楽章は圧巻だった。中間楽章の甘い音色でのカデンツァでは、彼の解釈はかなり冷静だった。シュヴァルベの音調は前代未聞の精密さで、他のヴァイオリニストは嫉妬すら覚えたであろう。最も感情のこもったルバート部分でのみ、すすり泣くような上ずったピッチを採用した。」とも書いている。

ウェルナー・オールマンは *Tagespiegel* 紙にミシェル・シュヴァルベがサン＝サーンスのヴァイオリン協奏曲第3番において顕著な成功を成し遂げたと述べている。ほとんど2小節くらいしか休みがないソロを驚くべき精密さと、深くみずみずしいG線の音色、そして微妙な細部の表現をもって非常に価値あるものとした。この高度な演奏は、このコンサート・マスターが趣も特色も持ち合わせたソリストでもあることを証明している。オールマンの *Der Tag* 紙の同僚は、シュヴァルベは「華麗なるパッセージを魅惑的に演奏する策略を身につけた。甘く、粹な旋律にふさわしい高貴な上品さを持って演奏した」と評している。

指揮者にとってのメイン作品はストラヴィンスキーのバレエ音楽《ペトルーシュカ》であった。*Die Welt* 紙でハインツ・ヨアヒムは85歳のピエール・モントゥーが振ったとき、この50年の音楽史がにわかに真に迫ったと見ている。「《ペトルーシュカ》は元々ピアノ協奏曲として考案され、後にディアギレフのバレエ団のために完成された作品だが、なんとといっても彼こそがこの作品の記念すべき初演をした指揮者なのだ。モントゥーは精神的に活発で熱意に満ちていた時代をここに再現してみせた。[...]スコアは、ストラヴィンスキーが後に改訂した少々学術的過ぎて堅苦しい新バージョンではなく、色彩に満ちたオリジナル版のスコアが使われたが、これは著作権法違反をしないための配慮でもあった。[...]新鮮で感情に直接訴えかけるような演奏で、独特の映像を伴うような表現も大変魅力的だった。このコンサートで視覚的経験が刷新されたと感じた聴衆も多いだろう。」

*Der Tag* 紙の評論家は、モントゥーが今でも‘魅惑的な音楽家’で有り続けていることを積極的に明言している。「彼の音楽からほとぼしる有り得ないほどの生命の磁力に抗える人はいない。この老成した紳士のプロフェッショナルな指揮から発せられる至上の喜びに心を掴まれてしまうのだ。[...] ベルリン・フィルのメンバーにもこの感覚はあまねく伝わり、最上の緊張感と配慮をもって演奏にあたった。弦楽器の音色は柔らかく、温かく、カラヤンと演奏する際のような感覚の冴えがあった。フルートからファゴット、超絶技巧のトランペットから轟くバス・チューバ、打楽器奏者の紳士達、どの譜面台の間にも心躍るような喜びを紡ぎだす傑作の音が満ちていた。」

Helge Grunewald, 2012

訳：小林茂樹

